令和４年度　第８回

鞍手町立小学校の統合に向けたあり方検討委員会

令和５年２月 16 日
鞍手町総合福祉センター　多目的ホール

１．開会

２．統合小学校の建設地に関する報告ついて【教育長より】

３．統合小学校の建設地について【町長より】

４．その他

５．閉会

配布資料

【資料 1】統合小学校の建設地について（報告）
【資料 2】旧鞍手北中学校と剣南小学校　小学校設置に伴う項目別比較表
【資料 3】旧鞍手北中学校坑道写真
【資料 4】剣南小学校上空写真
【資料 5】旧鞍手北中学校上空写真

【資料１】

４鞍教環第 23 号
令和５年１月 31 日

鞍手町長　岡崎　邦博　様

鞍手町教育委員会
教育長　外園　哲也

統合小学校の建設地について（報告）

令和４年２月 25 日付「今後の町立小学校の統合に向けたあり方について（報告）」に基づき、現状の６小学校を１校に統合することとした鞍手町立小学校（以下「統合小学校」とします。）の建設地について、以下のとおり決定しましたので報告します。

記

統合小学校は、これからの鞍手町を担う子どもたちの唯一の小学校であり、今後のまちづくりの方向性にも大きな影響を与えるものであることから、その建設地の決定は、教育委員会の最重要課題と考え慎重な協議を行いました。

現在の６小学校の状況に目を向けると、既に複式学級を編成せざるを得ない小学校があり学校運営上の課題が顕在化するなど、小学校の統合は一刻の猶予も許されない状況にあります。そのため、建設候補地としては、統合小学校の規模に応じた校舎・体育館・グラウンド等が整備可能な広さを有し、速やかに造成等の着手が可能となる町有地であることを要件に、鞍手中学校敷地、剣南小学校敷地、旧鞍手北中学校敷地の３箇所として、検討を進めました。

３候補地ともに一長一短があり、何に重きを置くかによっては、いずれの候補地にも統合小学校の建設地として相応しい要素を備えています。教育行政を所管する教育委員会としては、これからの時代に求められる学校教育を実現し、鞍手町を担う子どもたちを安全に育むことを最優先とし、第５次鞍手町総合計画後期基本計画及び鞍手町教育大綱に示された町の方針、附属機関である鞍手町立小学校の統合に向けたあり方検討委員会からの提言を踏まえて検討しました。

その結果、少なくともこの先 50 年、次世代の子どもたちまでが通うことになる統合小学校の建設地として、最も多くメリットを有し、最もデメリットが少ないと考えられる**剣南小学校敷地**とすることに決定しました。

これから、統合小学校を整備していくにあたっては、剣南小学校に児童を登校させた上で工事を施工する必要があることから、工事及び工事車両等に対する安全確保と工事期間中の剣南小学校児童の教育活動の確保に万全の対策をとった上で、子どもたちが「あの小学校へ通いたい」と思えるような小学校を整備するとともに、スクールバスの運行方法を含めて保護者の方が安心して子どもたちを通わせることが出来る取組を可及的速やかな開校に向けて進めていきます。

なお、教育委員会における各建設候補地に対する意見と剣南小学校敷地を建設地とした理由及び鞍手町立小学校の統合に向けたあり方検討委員会からの第３次提言については、別紙により併せて報告いたします。

【別紙】

鞍手町教育委員会
統合小学校建設候補地に対する意見 及び 建設地決定の理由

１.各候補地に対する意見

（１）鞍手中学校

小中連携という点においては最もメリットが大きい。また、スクールバスの運行面においては、中学校と同じルートを運行することとなり、バス停を共有出来るなどメリットがある。

その反面として、町内全児童・生徒が通うことになり、徒歩、自転車、スクールバス、自家用車による登下校に関する安全確保に対する課題が大きい。また、現中学校の機能を維持した上で小学校を建設するには校舎が 5 階建てとなるなど、敷地面積が狭い。

（２）剣南小学校

小中連携という点においては、鞍手中学校やと隣接しておりメリットがある。また保幼小の連携という点でも幼保連携型認定こども園と隣接していることでメリットがある。

通学面に関しては、剣南小学校・鞍手中学校に対する歩道等の整備が既になされている。また、スクールバスの運行面においても、中学校と小学校がほぼ同じルートを運行することとなり、バス停を共有出来るなどメリットがある。

敷地面積については、旧鞍手北中学校には及ばないが、現在の 1 学級 35 人や ICT の導入など、余裕をもった学校施設の規格になったことを踏まえても、700 人規模の児童数であれば十分な面積がある。

課題としては、剣南小学校に児童を登校させた上で建設工事を施工する必要がある点であり、工事・工事車両に対する安全確保と工事期間中の剣南小児童の教育活動の確保である。

（３）旧鞍手北中学校

敷地面積の点で最も余裕があり、現在学校として使用されていないため、工事期間中の児童の安全確保にも気を配る必要がないというメリットがある。

小中連携という点においては鞍手中学校と最も距離があり、公共機関・民間の店舗等の社会との接点という点でも、スクールバスが必要になるケースが多く、課題が大きい。

通学面に関しては、古月・新延小校区からの歩道が整備されておらず、県道を含む歩道の新設のための大規模な工事が必要になる。この点についてはスクールバスを運行すれば回避できるが、スクールバスの運行（徒歩通学）範囲の設定において、保護者の理解を得られるのか課題が残る。また、徒歩通学圏内となることが想定される剣北小校区においても、町道役場・猪倉線及び中山線においても、歩道が設置されている箇所はあるものの幅が狭く、安全が確保出来ているとは言いがたい。

また、炭坑があった場所で坑道が通っており、現在も坑道部分が崩落した穴がある。坑道に対する安全対策にいかほどの費用が必要になるか、現時点では不透明な部分が大きい。

２.建設地決定の理由

旧鞍手北中学校敷地は、小学校の建設地としてみると、敷地面積の点で最も余裕があり設計の自由度も高く、広い敷地を有効活用すれば、スクールバスの受入や保護者の自家用車による送迎対応を含む様々な対策が可能であり、また、現在学校として使用されていないため、工事期間中の児童の安全確保にも気を配る必要がないという利点がある。

しかしながら、こうした利点を享受するためには、旧中学校ではあるもの、小学校としては全く新しい場所に整備することになることから、新たに通学路となる道路の整備を始め、現在も剣北小学校の通学路として課題を抱えている町道役場・猪倉線や中山線を改修するなど、統合小学校としての通学路の安全確保のためには、旧鞍手北中学校敷地周辺全体の抜本的な整備が必要になる。

また、旧鞍手北中学校敷地の最大の懸念点は坑道対策が必要なことにある。当該地には鉱害賠償登録がされており、坑道対策に係る費用は鞍手町の単独費となる上、その費用や対策に要する期間も不透明な部分が大きい。児童の安全確保は基本であり、鞍手町立小学校の統合に向けたあり方検討委員会からの意見にも示されている通り、「坑道がある」というそのこと自体に保護者としては不安を感じる。小中連携の観点からも鞍手中学校との距離があるなど、旧鞍手北中学校敷地を建設地とするには課題が大きい。

鞍手中学校敷地は、小中連携やスクールバスの運行など、ハードとソフトの両面で鞍手中学校と連携することにより、様々な面で効率的な運用を行うことが見込まれる。

その反面として、町内の全児童・生徒が同じ場所に登下校することから、登下校に対する安全確保に課題がある。

令和４年５月時点の鞍手中学校生徒数は 395 人であり、特に朝の登校時間帯については、徒歩、自転車、スクールバス、保護者の自家用車による送迎と、かなり混雑している状況にある。生徒、教職員、保護者の方、地域の方の理解と協力により、開校以降大きな事故は発生していないが、これに統合小学校児童 700 人が加わり 1,100 人と約３倍の規模にふくれあがることを考えると、安全確保に対する不安は大きい。

また、現在中学校として使用していない部分の敷地面積は 3 候補地の中で最も狭く、少なくともグラウンドは中学校と共用する必要があり、校舎も 5 階建てと高層化する。

メリットと表裏一体となるが、中学生を怖いと思う小学生の心理面への負担や、小学生の遊び場としての運動場と中学生の部活動の場として運動場の調整など、学校運営に関する課題も生じる。

剣南小学校敷地は、前述の２候補地の利点を効率よく備えている。鞍手中学校とは道路を一本挟んで隣接しており、鞍手中学校の機能を完全に確保した上で小学校を整備でき、小中連携にも取り組みやすい。また、敷地面積においても旧鞍手北中学校敷地には及ばないものの十分な広さを有している。

通学面に目を向けても、スクールバスの運行については、鞍手中学校とバス停を共有できるなどのメリットがあり、通学路の整備という点でも、既に剣南小学校と鞍手中学校の通学路として一定の整備がされている。

これからの学校教育は、誰もが今後の社会を見通せない時代に子どもたちがたくましく生き抜くための力を育成するため、家庭や地域社会と連携し、学校だけでは得られない知識・経験・能力を身につける機会を確保する必要がある。

剣南小学校は、鞍手町の医療、福祉、商業などの都市機能が集約された鞍手町立地適正化計画における都市機能誘導区域にあり、加えて幼保連携型認定こども園とも隣接するなど、子どもたちの様々な社会体験の機会を確保しやすい。

また、鞍手中学校と隣接していることは、小中連携の点でメリットがあるだけでなく、保護者にとっても、義務教育機関である各々１校の小学校と中学校が一体的に整備されてい

ることがメリットになり、人口減少に歯止めをかける必要がある鞍手町の魅力の向上にも寄与すると考える。

剣南小学校敷地の懸念点としては、剣南小学校に児童を登校させた上で工事を施工しなければならない点である。工事及び工事車両等に対する安全確保と工事期間中の剣南小学校児童の教育活動を確保する必要がある。

安全確保については、設計段階から施工業者等と十分な打ち合わせを行い、万全の対策を講じる。教育活動の確保に関しては、特に体育の授業に関しては鞍手中学校のグラウンドやプールなどを共用する必要がある。統合後の小中連携も見据え、剣南小学校敷地に最も近い位置に鞍手中学校へ入場できる新たな出入口を整備するなどの工夫が考えられる。

工事期間中の剣南小学校児童へは負担をかけることになるが、総合的に考えると剣南小学校を統合小学校の建設地とすることが最適と考える。

【資料２】

旧鞍手北中学校と剣南小学校　小学校設置に伴う項目別比較表

	項　　目	旧鞍手北中学校	剣南小学校
1	登下校の安全性	歩道が整備されてない部分があり危険。 今後、歩道整備は厳しい。	ほぼ歩道整備済み。（鞍手中・剣南小） 中学校と同じバス停が使えるので安全。
2	保・小・中連携	離れているので交通手段が必要であり、時間のロスが大きい。（スクールバスの運転手は、有料）	全て隣接しているので、徒歩で可能である。
3	スクールバスの運行	新しいバス停と校区を設定しなければならない。 バスの台数が増える。 低学年のバス乗下車は、配慮が必要である。 多くの児童がバスを利用するため、体力低下の心配がある。	鞍手中のバス停と校区を共有することができる。（小学生を考慮した範囲を考える必要がある。）また、バス停で、中学生が小学生を見守れる。 早朝の仕事で、家の戸締まり等でバスが使えない児童・生徒は、保護者が送るとき、小中学校が近くて便利である。徒歩で登下校できる児童が多いので、バスの台数は少なくてすむ。
4	グラウンドの整備等	坑道が最低４本あり、調査、改良工事にかなり費用がかかる。敷地面積は、かなり広い。	旧鞍手北中学校より狭いが、６小学校で一番広い。 （150ｍトラック可能）
5	入り口の整備	現在の出入り口では、方向転換ができないので、作り直す必要がある。	現在の入り口を広げる必要がある。
6	運動会等、行事の駐車場の利便性	旧分校の運動場があり、学校の裏に駐車場ができるが 1000 台は、駐車できない。また、駐車場の整備が必要である。	中学校、中央公民館の駐車場を活用すれば、1000 台は、可能である。駐車場の整備は、不要である。
7	校舎建設のコスト	補助金は、ほぼ同じ	
8	立地適正化計画	居住誘導区域	都市機能誘導区域
9	その他	博物館、役場等が離れている。 体験学習が、困難である。	保育園、博物館、役場、病院、スーパー、銀行、パン屋、家具屋等の社会見学も歩いて行ける。 剣南小学校の体験学習が、継続してできる。
工事期間中	体育の授業等	問題なく実施できる。	体育館でも可能であるが、中学校の運動場やプールを使うことが可能である。 運動会は、中学校か、町民グラウンドを使用する。
	昼休み	剣南小の運動場が使える。	前庭・体育館のみになる。
	工事中の安全性	児童がいないので安全である。	児童の安全確保をして工事をする必要がある。
鞍手町立小学校のあり方検討委員会の評価結果		◎５人（１５点）○３人（６点）△６人（６点） 合計【 ２７点 】	◎５人（１５点）○７人（１４点）△２人（２点） 合計【 ３１点 】

【資料３】旧鞍手中学校坑道写真

No. 1

No. 3

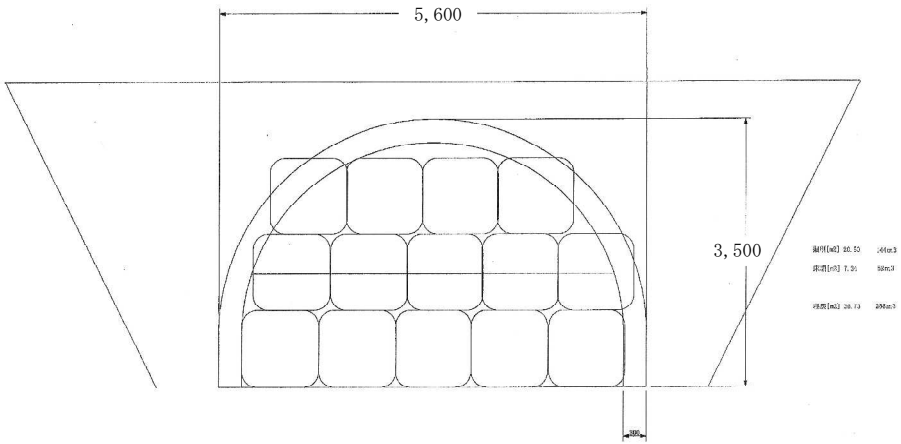
No. 2

No.4

【資料３】旧鞍手中学校坑道写真

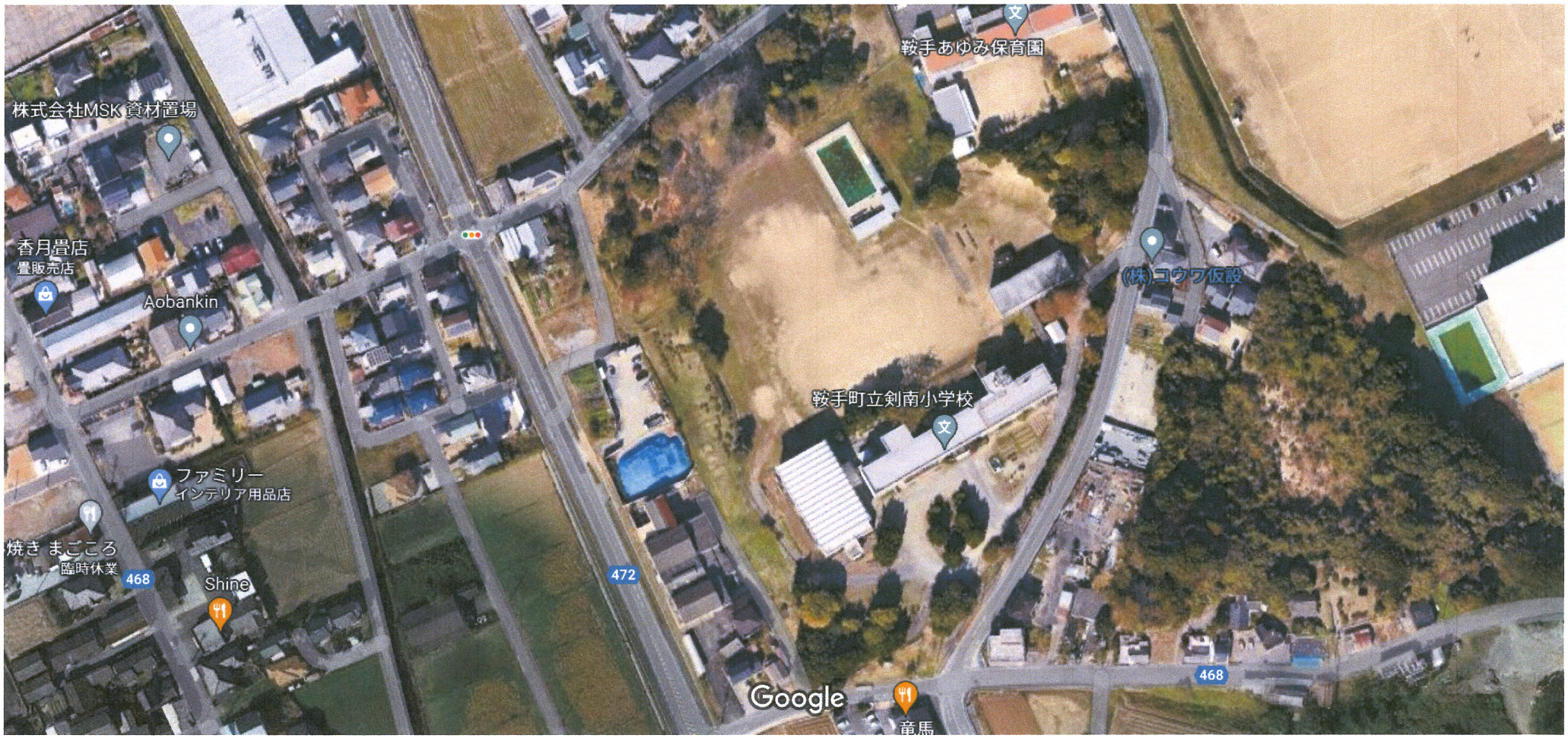
No. 5

No. 7



No. 6

No. 8



画像 ©2023 CNES / Airbus、Digital Earth Technology、Maxar Technologies、Planet.com、地図データ ©2023　50 m

【資料４】　剣南小学校上空写真

画像 ©2023 CNES / Airbus、Digital Earth Technology、Maxar Technologies、Planet.com、地図データ ©2023　50 m

【資料５】旧鞍手北中学校上空写真